

[実践的研究]

高等教育へのスムーズな移行を促す教育課程の開発  
—高等学校に対する聞き取り調査結果を基に

日高 和美\*, 金子 研太\*, 白石 忍\*, 西川 三恵子\*,  
森江 由美子\*, 成富 勝\*, 山本 洋一\*

The Enhancement of Pre-enrollment Education for Smoother  
Transition from High School to University  
: Based on the Interviews with High School Teachers

Kazumi HIDAKA\*, Kenta KANEKO\*, Shinobu SHIRAIISHI\*,  
Mieko NISHIKAWA\*, Yumiko MORIE\*, Masaru NARITOMI\*,  
Yoichi YAMAMOTO\*

Abstract

This study aims to develop the curriculum and teaching methods in the Kyushu Kyoritsu University Faculty of Economics. In this paper, we report the results of a survey conducted for high school teachers to enhance pre-enrollment education for smoother transition from high school to university.

**KEY WORDS** : Curriculum Development, Pre-enrollment Education

## 1. 課題設定

本研究は、本学経済学部において中等教育から高等教育へのスムーズな移行を促すためのカリキュラムや指導方法の開発を行うことを目的としている。

近年、中央教育審議会答申などで「学士課程教育の質的転換」、「高等学校における教育課程改革」そしてそれらをつなぐ「高大接続改革」が重要な課題として謳われている。

学士課程教育の質的転換については、中央教育審議会答申（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」を受け各大学において様々な魅力ある授業実践・方法の開発やその実態に関する調査が行われている<sup>1)</sup>。

また、高等学校における教育課程改革については、大学入試改革や義務教育段階における教育課程改革を見据えて平成30年3月に新しい学習指導要領が示された。平成30年版高等学校学習指導要領の改訂のポイント<sup>2)</sup>の中でも「高大接続改革という、高等学校教育を含む初等中等教育改革と、大学教育改革、そして両者をつなぐ大学入学者選抜改革の一体的改革の中で実施される改訂」であることが強調されている。教育課程の方針としては、①「何ができるようにするか」を明確化、②主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善、③各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確立、④教科・科目構成の見直しの4点を示すとともに、各学校段階の接続に関する記述も加わり、これまでよりも小学校から高校卒業までの12年間の学びの接続を意識したものとなっている。

本学においても学長のリーダーシップの下、学士課程教育の改善としてのカリキュラムの見直しや初年次教育（福原学）の実践及び見直し、アクティブラーニングの実践、PBL型授業の導入（ワークショップ）、ICTを活用した授業方法の開発等に取り組む実践<sup>3)</sup>を蓄積しつつある。そして「高大接続」をスムーズに行うための取組として入学前サポートや入学直後の新入生宿泊研修等を実施しており、こちらも一定の成果を上げている。

他方で、大学における教育実践を高等学校はどのように認知しているか、また大学が実施している入学前サポート等の取組についてどのように認識されているか、という点については明確に把握できていない<sup>4)</sup>。

研究チームでは協議の結果、本研究においてはこれ

までの取り組みをさらに改善し、本学の学生にあったカリキュラムの開発・指導方法の開発を目指し、研究を進めることとした。

本稿においては、特に「インプット」の段階に焦点をあて、学生を送り出す側（高等学校教育）のニーズや入学前の高校生ニーズや状況、高等学校教員の本学に対する期待等を明らかにする。なお、本研究は平成29年度より学長政策費「特別研究費（A）」の助成を受けたものである（担当：日高，金子）

## 2. 分析枠組みの構築

### （1）分析視座・質問項目の設定

ここでは、聞き取り調査を行うにあたっての分析視座・調査手法について触れておく。

本研究の目的を踏まえ、メンバーで検討した結果、本学に入学する学生の特徴をつかむために「在籍校において大学進学を希望する生徒の傾向と本学を志望する学生の傾向」、入学生の将来への進路に結びついたカリキュラムを開発するために「卒業後の進路」に関する意識、そして本学合格後入学前までの期間をつなぐ「入学前サポート」に関する印象、最後に「高校教諭が期待する大学において成長してほしい部分」の4つの内容を調査の核とすることとした。その他、関連する質問を加え下記の質問項目を作成した。

- |   |
|---|
| <p>①先生から見て、高校生は、全般的に大学進学・大学生活に対してどのような点で期待をしているでしょうか？また、どのような不安を抱いているのでしょうか？</p> <p>②貴校の生徒さんは、大学卒業後の進路（就職や大学院進学など）をどう考えていますか。</p> <p>③現在、本学では高校から大学へスムーズな学びの移行が図れるよう、合格後入学までの期間に入学前サポートとしてレポートの提出・添削などの取り組みを行っていますが、先生方から見て大学を進学する生徒が大学にスムーズに移行するために、大学側からどのようなサポートがあったらいいと思われますか？</p> <p>④先生方から見て、本学に進学を希望する生徒さんに大学4年間でどのような力をつけてほしいと思われますか？具体的に大学で学んでほしい内容・経験してほしいことなどがありましたら教えてください。</p> <p>⑤現在本学に在学している学生が高校生の時、どのようなタイプの生徒でしたか？</p> <p>⑥現在九州共立大学経済学部に進学希望している生徒さんはどのようなタイプでしょうか？</p> <p>⑦先生は、どのような生徒に九州共立大学経済学部を勧めますか？</p> |
|---|

調査方法については、質問紙調査なども検討したが、高校とのラポールの構築のためにもインタビュー調査を行うこととした。

## (2) 調査対象・調査時期・分析対象

調査対象校は、福岡県内及び近隣の九州・山口県内の在学生の出身高校を選定した。平成29年度の段階では基本的には当該年度のみ調査を行い平成30年度についてはフォローアップ調査のみ実施する予定であったが、経済学部への入学希望者及び入学生増の状況を受けてさらなるニーズの把握が求められることから、同等の調査を平成30年度についても実施している。なお、調査対象者は、進路指導担当教諭または3学年担当教諭、可能であれば管理職（校長・教頭）と設定した。

現在までに、のべ40校を超える高校に対して調査を実施しているが、様々な制約がある中で実施したため、項目すべてに関するデータを得ることはできなかった。本稿においては先に掲げた4つの視点からのデータを得ることができた24校を分析対象とする。

表1 調査対象校

	県内/県外	設置学科	対応者
1	A校 県内	普通科・総合学科	進路指導担当
2	B校 県内	普通科・総合学科	進路指導担当
3	C校 県内	専門高校	3学年主任
4	D校 県内	専門高校	進路指導担当
5	E校 県内	総合学科	進路指導担当
6	F校 県内	普通科	進路指導担当
7	G校 県内	総合学科	進路指導担当
8	H校 県内	普通科	進路指導担当
9	I校 県外	普通科	進路指導担当
10	J校 県外	専門学科・総合学科	進路指導担当
11	K校 県外	総合学科	進路指導担当
12	L校 県外	普通科	進路指導担当
13	M校 県外	普通科	進路指導担当
14	N校 県外	普通科・専門学科	進路指導担当
15	O校 県外	普通科	進路指導担当
16	P校 県外	普通科・専門学科	進路指導担当
17	Q校 県外	普通科	3学年担任
18	R校 県外	普通科	進路指導担当
19	S校 県外	普通科	進路指導担当
20	T校 県外	普通科	進路指導担当
21	U校 県外	普通科	進路指導担当
22	V校 県外	普通科	進路指導担当
23	W校 県外	普通科	進路指導担当
24	X校 県外	普通科	進路指導担当

(担当：日高，金子，白石，成富，山本，西川，森江)

## 3. 調査結果

### (1) 高校教諭から見た、現在の高校生が抱く大学及び大学生活に対する期待・不安

まず大学進学そのものに関する言及をまとめていく。大学への進学そのものについては、県内の高校については、「大学に行けるならば行きたいが、保護者の経済力との関係もあるので地元から通える大学ということになる（B校）」といった回答が見られる。

県外の高校については、「県内に大学が少ないので生徒は大学を身近に感じることができていないので「大学」そのものへのあこがれもあると思います（H校）」「大学、ということもありますが、大学があるような都会に出る、という点で生活や人に馴染めるかということはあると思います。（I校）」、「当該県内から出た事のない生徒がほとんどですので、当該自治体と違う空気を味わう事、街の雰囲気味わう事、沢山の人たちに触れ合えることその一つ一つを楽しみにしていると思います（J校）」、「県外に進学する生徒が少ないので、県外を選んでいる子は目的意識がある子、経済的な条件がクリアできる生徒が大学進学を選んでいます（K校）」「専門学校も入れれば、本校は9割が進学となりますが、そのうち7～8割は県内の大学に進学します。経済的な面もありますが、保護者ができるだけ近くにいてほしいという意向を汲んでそうしている生徒が多いように思います（L校）」

大学に対する不安については、経済面及びそれに伴う学業とアルバイトの両立について不安を感じていると回答する高校が多かった。具体的には、「経済面の心配が大きい。本校出身者だとおそらく9割程度が大学進学後に奨学金を借りることとなる。私立大学進学後、4年間の金額と返済期間を考えて不安を持つ生徒もいる。高校側としては学力特待入試などを勧めている（G校）」、「経済的な問題が第一だと思う、最近特に厳しいご家庭が多くなっているように思う（P校）」などである。

授業に関する内容の「授業についていけるかどうか心配である（A校）」、「専門高校の生徒が大学の授業についていけるかが心配である。一方で、今までとは違う文化の中で新しいものに触れてほしいとおもっている（B校）」などの意見も見られる。

この他、大学への進路指導については、「2年生の夏からオープンキャンパスなどに参加し、自分の目で見進路を決めるよう指導している。自分で選び取った進路とそうでない進路では、進路決定後が違う。（D

校)」として、生徒に考えさせ、進路・大学を研究するよう指導する高校も見られた。

大学進学そのものの状況については、「大学進学者としては人数としては少ないが常に一定数の志望者がある。最近はそのま一流企業で就職を決められる水準の生徒が4年制大学を志望することも増えてきた。ただ、専門高校については入学時点で卒業後は就職を第一志望にしている生徒も多い。大学についていけるかといった不安やそもそも進学に興味を持てなかったりするのではないかと(D校)」、「4年制大学進学を希望する者は全体の半数程度で志望や学力により選択を行っている。生徒の普段の様子から、博多駅さえ遠いと感じている生徒もあり、遠い大学は選びにくい。総合学科という事もあり常に先を考えて逆算するよう指導を行っている。」という言及も見られた。

その上で、本学を志望する高校生の傾向としては、スポーツを頑張ってきた生徒で大学でも続けたい生徒(C, D, F, G, L, M, O, Q, R, T校)という回答が圧倒的に多かった。また、進路担当教諭として「貴学は少人数指導をしてくださり面倒見がよく、丁寧に見てくださる。(A, G校)」という点から高校生から本学を勧めてくださるケースもある。

## (2) 高校教諭から見た、高校生が描く卒業後の進路

全ての学校において、就職を中心に考えていると回答しているが、その中でも公務員(行政, 教員, 警察, 消防)を目指している生徒が多いという回答が最も多く(C, H, I, J, K, L, M, P校)そのうち6校は県外高校である。その背景には、将来的には地元に戻りたいが、企業誘致が進んでいない関係で安定した公務員を目指すケース、保護者の希望などがある。

また、福岡県内の高校においては、地元志向が強く県外にでようと考えている生徒は少ない(D校)「女子が多いこともあり、わが家から通える範囲で進学・就職を決めてほしいというニーズが大きい(E校)」という学校や、「将来の進路まで広げて進路指導はしていない」と率直に解答される高校もあった。

県外の高校においては、「最初は、4年後には地元に戻ってきます、と聞いて卒業していくが、都会を味わった生徒の9割程度は戻ってきません。(J校)」、「安定した企業がなく、公務員等に受からない限りは戻ってこれない、戻っても生活ができない」という回答も見られた。調査の中で本学の公務員の合格実績について紹介すると、「大学においても、丁寧に指導して結果を出していただけてありがたい」と評価頂く場面も

多かったことを付記しておく。

## (3) 入学前サポートについて

現在行われている入学前サポートについては、当該質問を行った全ての高校で肯定的に受け止められている。その理由としては、「推薦入試やAO入試で先に合格した生徒や就職など他の進路の生徒が一般入試に向けて頑張ろうとしているクラスの雰囲気や壊す面があり課題があると助かる(D校)」、「動機付けとして非常に助かる(G校)」、「推薦で合格した生徒のモチベーションを引き出すためにもこれからもしてほしい(H校)」、「推薦で決まった生徒はそこで学習がストップする傾向があるので、見てもらえるのは非常に助かる。(J校)」などの意見が見られた。

課題が生徒に届いた後の指導・対応に関しては、高校で指導を行った上で提出しているケースと、生徒に任せている学校など異なっている。これについては、「高校側では日々の受験指導で手いっぱいであり合格が決まった生徒の課題添削をしている余裕はない。期限内で課題を出したかどうかの確認が精いっぱいである(G校)」などの言及も見られた。

なお、内容については「英語力を維持してほしいので英語の課題も出してほしい(C校)」、「可能なら2月から自宅学習になるので事前面談を行って進路や大学生生活の目標への意識付けをしてほしい(E校)」、「添削まではしていただかなくていいので、必要な基礎教科については課題を出してほしい(中略)。入学までの期間が長いので授業が始まってついていけなくなるのではないかと心配になります。課題が出れば生徒はやるので(J校)」、「合格後の高校での過ごし方も重視しますなどの言葉が入っていると生徒たちもしっかり頑張ると思う(P校)」などの意見も見られた。モチベーションをあげるために「先輩たちの体験談などを同封すると良いのではないかと。春休みの間、ゆるみ過ぎた生活をして出遅れたケースやしっかり準備をして臨んだケースなど」などの提案も頂いた。その他、問題集の指定(T校)や課題図書(T, V校)、入学前に読んでほしい図書の指定(F, V校)、ツールに関して「昨今の生徒の関心事でもあるし時代の先端を行く風潮としてスマートフォンやアプリを使った指導をして頂けるといいなと思っている。(W校)」などの意見も見られた。

## (4) 高校教諭が期待する大学での成長

高校教諭が期待する大学での成長については、一番



多かった内容が「自分で考えて行動できる、主体的に自主的に行動できる力 (A, D, E, H校)」であった。その他、「英語力、コミュニケーションスキル (C校)」、「社会人として活躍できる基礎力 (E校)」、「自分の能力を目に見える形で示していく必要がある、資格取得など頑張してほしい (F校)」、「色々使える方法や知識や技術 (I校)」、「今ある資源を活用する発想力を育ててほしいです。当該地域は過疎化が本当に進んでいます。土地は沢山ある、でも何も使われていない。何も無いところから何かを生み出す力が本当に必要なんです。発想力やアイデアを持って帰ってほしい (J校)」、「視野を広げてほしい (K校)」、「可能ならば海外にも行ってほしい。論理的に考える力も身に付けてほしい。(M校)」、「学び続ける力 (O校)」などが見られた。(担当：日高、金子、白石、森江、西川)

#### 4. 結語

冒頭にも述べたように、本研究は本学経済学部において中等教育から高等教育へのスムーズな移行を促すためのカリキュラムや指導方法の開発を行うことを目的とするものであった。本稿においては特に、「インプット」の段階に焦点を当て、高校教員に対する調査を実施した。調査結果から得られた知見を分析視座に従い以下4点述べる。

第1に、高校側から見た現在の高校生が抱く大学及び大学生活に対する期待・不安について述べていく。大学全般に対する印象としては、福岡県内・県外かどうかでその印象に差異が見られた。九州・山口県の中でも福岡県は最も大学が多いが、自治体により大学が身近にないこともある。そうした自治体には、大学説明会や高校訪問の中で大学での学びや大学生活に関する身近な例などを示すと、高校生も具体的にイメージしやすくなるのではないだろうか。また、本学を志望する高校生の傾向としては、スポーツや部活動を継続して頑張っていきたいという生徒が多かった。これについては当初から予想していたが、それを再確認することができた。今後、大学におけるクラブ活動やサークル活動の取組や情報などを積極的に公開することで、高校在学中に心構えができるのではないだろうか。

不安と感じる内容について生徒の経済面を挙げる高校も多く見られた。高い学習意欲を持って本学への進学を志望する生徒に対する奨学金制度の維持・発展は今後も非常に重要な課題であると確認できた。この他、専門高校に通っている生徒に対しても、入学前レポー

トと連動して大学生活において必要となる学習内容や読んでおいてほしい図書等を示すことで不安を解消することができると思われる。

第2に、高校教諭から見た高校生が描く卒業後の進路について述べる。先に示した通り、高校側から見た回答としては「公務員」を志望する生徒が多いという結果であった。経済学部においては、学部教員の努力もあり年々公務員の合格者が増加している。また、本年度よりこれらの学習をサポートする仕組みであるK-CIPも始まり、この制度の活用も含め努力を継続していかなければならない。他方で、学生の視野を広げるためにも大学生活の中で公務員以外の職業分析やインターシップ、ボランティアなどの体験活動を推進していく必要があると感じた。

第3に入学前サポートについて述べる。現在行われている入学前サポートは高校現場において好評を得ていた。特に、推薦やAO入試などで早々に合格した生徒の勉強に対する意識付けになっている点、関連して早く合格した生徒のモチベーションが下がりまだ合格していない生徒に影響を及ぼすこともあるため、高校からも「ありがたい」という感想も多く出ていた。この他、大学でも必要となる教科の問題集の配布(添削は不要)、課題図書やおすすめの図書などを提示してほしい、という意見も見られた。これらの情報は学部内の入学前サポート委員会とも共有し、可能な部分から改善を図っていききたい。

第4に、高校教諭の期待する大学での成長について述べる。大学において成長してほしい部分として「自分で考えて行動できる力」が最も多く挙げられていた。この他、「発想力」、「視野の広がり」などの期待も挙げられていた。これらの力は、今回の教育改革で主眼とされている能力にもつながるものである。これらの力を伸ばしていくために、教員個々人の専門性の向上を図ると同時にそれを学生に伝えるためのアクティブラーニングを実践する能力を一層高めていかなければならないと感じた。

最後に、本研究を通して、学生の出身高校から貴重なデータを得ることができた。この貴重なデータを今後学部内で共有しFD活動につなげていくことで日々の教育実践に結び付けていきたい。また、この調査を通じて、高校教諭と在学中の学生の様子や本学を希望している(調査時期によっては本学に合格し進学を決定した)生徒の様子をうかがうことができた。こうした地道な活動を続け、必要に応じて情報共有を行うなど生徒・学生へのサポート体制を築いていきたい。

なお、本研究においては現時点でまだ全ての調査結果を精査できていない点、学生の視点からの検証が行われていない点で課題が残る。今後この課題については、地道に取り組んでいく。(担当:白石・日高・金子)

#### 註及び参考文献

- 1) 例えば、アクティブラーニングの実践に関する調査研究(河合塾編著『「学び」の質を保証するアクティブラーニング—3年間の全国大学調査から—』東信堂, 2014年, 河合塾編著『アクティブラーニングでなぜ学生が成長するのか—経済系・工学系の全国大学調査からみえてきたこと—』, 東信堂2011年)や大学教育学会の課題研究としても取り上げられている(一般社団法人 大学教育学会編『大学教育学会誌』, 第39巻第1号(2017), 第40巻第1号(2018), 第41巻第1号(2019))。
- 2) 文部科学省HP「高等学校学習指導要領の改訂のポイント」より[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2019/02/19/1384661\\_002.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2019/02/19/1384661_002.pdf)(最終検索日 2019年7月21日)
- 3) 本学においては学長政策経費として、①電子黒板等ICTを活用した先進的な学習により教育の質向上を図ることが可能な研究、②アクティブラーニング(ディスカッションやグループワークを中心とした双方向型で学生の主体的、能動的な学びの授業)を用いた教授法・学習法を開発する研究、③複数教員が担当する同一授業科目の教授方法、成績評価基準等の平準化や、資格免許取得関連科目の体系化・組織化に関する研究、④達成すべき学修成果に整合した教育活動に関する研究、⑤その他、学士課程教育の質的転換を図った研究の5分野の実践研究を奨励している。
- 4) ただし、附属高校である自由ヶ丘高等学校とは高大接続委員会等を通じて意見交換、共同研修などの機会がある。
- 5) 特別研究が採択されて以降は定期的にメンバーで研究会を実施し、研究目的の確認、情報の共有、質問項目の設定等を行っている。

Received date 2019年7月21日

Accepted date 2019年8月7日